

リベリアからの報告

(社)日本建築家協会(JIA)登録建築家/株粋設計 設計本部 国際部

古池廣行

日本の無償援助による「日本・リベリア友好母子病院」プロジェクトで約2年間駐在したりベリアから帰国したのは1983年10月、その1年後も10日ほど滞在した。リベリアの首都モンロビアを再び訪問する機会が訪れたのはそれから22年が経った今年の2006年3月末のことであった。隣国のコートジボアールは10年ほど前に大学病院のプロジェクトで何度も訪問したが、リベリアは長い内戦のため今まで訪問する機会がなかった。

今回の訪問はこの病院のフォローアップ調査が目的であった。シュミットハンマーによるコンクリート強度試験と目視による木造屋根トラスの構造的安全性チェックではまだ十分使えることが確認された。海岸に近接した環境からコンクリートの劣化を心配していたが、当時の品質管理の確かさが証明されたことにほっとする思いである。当時の施工関係者に敬意を表したいと思う。しかし、建物は20年以上の過酷な環境と戦争中に受けた小型ロケット弾による損傷が一部にあり、単純なフォローアップで対応する内容を超えていた。

現地側では2階建てながらエレベータの代わりにスロープを備えた病院は使い勝手が良いとのことで、自助努力とさまざまなNGOからの小さな援助で最低限の運営を行っている。しかし、建物は雨漏りや設備の故障で痛んでいる。医療機材も不足していて戦争中に分娩台を紛失した状態のままである。

市内の資機材店や施工会社を何とか見つけ、現地での改修工事の可能性が確認されたが、外務省の危険地域指定の規

則から日本人の長期滞在は原則的に認められていない状況とフォローアップ事業の限度を越えるため実施できる内容に限られるのは残念なことである。

首都モンロビアではアフリカ初の女性大統領エレン・ジョンソン＝サーリーフが看板を随所に立て、今こそ第二の建国の時だと呼びかけている。約1万5,000人駐留していると言われる国連リベリア・ミッション (UNMIL) と西アフリカ諸国経済共同体 (ECOWAS) の支援から独り立ちするためには、政府の中枢や社会を支える人材が大幅に不足して前途多難な印象だ。

リベリア再訪は、私に内戦というのが、顔面をぶんどられ記憶を失ってしまったかのように、人間の絆をずたずたに切り裂くものだという現実を突きつけた。音信不通となっている当時の関係者の写真を数枚持参して尋ねたが誰も知らなかった。本年4月から5月にかけて訪問したカンボジアでも同様な経験をした。内戦により病院整備に必要な過去の活動データが入手困難なことを思い知らされると苛立ちが悲しみに変わった。院長は、長い内戦のあいだ病院関係者が退去していて、その間のことも知らないとい力なく答えた。内戦は人間の記憶に連続性と絆を失わせてしまう。

首都モンロビアの瓦礫と化した高層ビルは、人間から記憶の連続性を断ち切る楔のように見える。街は破壊され私の記憶が戻るにはかなりの時間を要した。よく通った映画館も廃墟となっていた。破壊された国防省の建物は火災とかびにより黒く薄汚れたコンクリ



ートをさらけ出している。

ドライバーが街角に車を止めた時、電柱の影から子どもがこちらをじーと見ていた。その街角の少年はカメラを向けると、こぶしを握り締めたまま、シャッターを押すまで気をつけの姿勢をしてくれた。シャッターを押してお礼の手を上げると笑ってくれた。

UNMIL関係者がよく行く市内のレストランで食事をとった際、テレビニュースでテラー元大統領がナイジェリアからシラレオネに移送され、裁判にかけられると報道されると、拍手が沸いた。その時、レストランのボーイは戦争も終わり、学校にも通えるようになったことが一番うれしいと言ったことが印象に残る。戦争は教育の機会も奪っていたのだ。

UNMIL本部の駐車場には真っ白い日本製のランドクルーザーが整然と並んでいる。市内にも日本車はあふれている。どこかしこからも日本人は何時来てくれるのかとの問いがある。3,000m級の滑走路を備えたロバーツ国際空港は、UNMILによって維持され国連本部があるブリュッセルから便があり、日本の政府専用機も容易に離着陸が可能である。今のリベリアは各国援助機関の銀座となっている。

日本にはイラクで高く評価されたインフラをはじめとした学校や病院の整備を行った自衛隊の活動がある。こういったニーズのあるところに迅速に柔軟に活動を広げることができないのか。

現状の無償援助の仕組みを越え、民間人と自衛隊が共同作業をする可能性はないのか検討に値すると提言する。